

令和4年度 新たな課題に対応した人権教育研究推進校としての取組

1 研究当初の生徒の状況と課題

仲間内だけと思ってやり取りした誹謗中傷のメッセージや善意のつもりで情報を拡散してしまう行為など、ネット利用にかかる最低限のルールが守られていない状況が見られた。自らの行動が招く事態を予見できない未熟さ、ネットを利用するうえでの判断力の乏しさへの対応が求められる。そして、何よりも自らの行動が他者の人権を侵害する恐れについて、それを認識できるような人権意識の高揚が図られるべきである。

2 研究テーマ

「相互に人権を尊重し合う社会の実現に向けて、自ら判断し行動できる生徒の育成をめざして」

3 ねらい

ネット上のいじめをはじめとするいじめ問題の未然防止または解決に向けて、生徒会が主体となる活動、家庭への適切な情報提供による啓発、人権意識を土台とした道徳教育の充実により、自らの行動が他者の人権に与える影響について、確実に認識できる人権意識の向上を図り、自他の人権を尊重できる生徒の育成をめざす。特に今年度は「人権を守らなければならない」「誹謗・中傷を書いてはいけない」という消極的思考から、「守りたい」「書きたくない」という積極的思考へとシフトしていくための取り組みを進めると同時に、道徳の授業においても、「生徒自身の生き方と繋ぐ授業」をめざして研究を進める。

4 具体的な取組

(1) 研究の概要（様式1）

(2) 各領域における取組

ア 教科における取組

・取り組みの概要（様式2） ・指導案 ・ワークシート、生徒の感想

イ 道徳における取組

・取り組みの概要（様式2） ・指導案 ・生徒の感想

ウ 特別活動における取組

・取り組みの概要（様式2） ・生徒の感想

エ 総合的な学習における取組

・取り組みの概要（様式2） ・生徒の感想

5 成果と課題

(1) 成果

一昨年度にネットいじめの当事者となった現3年生の生徒たちは、一度人間関係が崩れると自分たちでうまく修復できなかったり、めだつ言動をする生徒を排除する傾向があった。しかし、この2年間で自分たちのクラスの良いところを「個性が認められ、うまく関われる工夫をしている」「個性を攻撃・排除しない」と、自信を持って言えるまでになっている。

生徒会人権教室では、生徒会役員たちが企画の段階から「意見の出し合いにせず、対話を通して深められる会にしたい」という思いで臨んだ。参加した生徒の感想からは、一人ひとりの感じ方の違いが予想以上にあることと、相手の立場に立とうとしないと、違いに気付けないことを感じた生徒が多かったことが分かる。

家庭への啓発では、コロナ禍で保護者全体への啓発が難しい中であつたが、学校評価アンケートにおいて「情報機器の使い方について、家庭で約束が決められており、守っている」に対しての肯定的な回答は昨年度と同程度であつた。

道徳教育と関連付けた人権意識の向上では、学校評価アンケートにおいて、全校生の98.8%が「道徳の時間にしっかり考えることができている」と肯定的な回答をしていた。授業や学習会後の感想からも自分の生き方に繋いで考えようとする姿や、誹謗中傷をする人はなぜそういう行為に及ぶのかを考え、自分なりの視点で人権を捉えようとする姿が見られた。保護者においても94%が「お子様は人が困っていたら、進んで助けたり手伝ったりすることができる」と肯定的な回答をするなど、人に優しくしたり、人の気持ちを考える心が育っていると考えられる。

(2) 課題

親子学習会が、コロナ禍により3年連続で延期され、保護者は自主参加での開催となり、参加した生徒や教員の認識と、参加できなかった保護者の認識との間に大きなギャップが生じている可能性がある。また、親子学習会では、実際の事例を基に学べることで、自分が加害者にも被害者にもなり得るという危機感が感じられるが、学校だよりや通信、懇談等での啓発だけでは、「知識としては知っている」だけの状態になりかねない。よって、制限された状況下で、学校・家庭・生徒の、未然防止に向けての認識や行動の方向性を揃えていく取組が必要である。

最後に、この2年間の取組を、本校の学校文化として捉え、更に深化・発展させていくことは、来年度以降の喫緊の課題であると真摯に受け止め、研究を継続していきたい。